

津軽のカミサマ

— 神・仏・霊との出会い —

吉村 哲明 弘前愛成会病院*

The *Kamisama* Mediums of the Tsugaru Region:
Contacting the Buddhas, Gods, and Spirits

YOSHIMURA Tetsuaki

シンポジウム企画者である實川幹朗大会長から「カミサマの代理として登壇して欲しい」との連絡を受けたのは2015年の4月であった。カミサマとは東北地方に広く分布する民間の巫者のことである。ほぼ同時期、大会長の並々ならぬ意気込みが記された「心理学に魂を取り戻す」と題する「大会の趣」が筆者の手元に届いた。筆者に求められたのは「カミサマの世界における神・仏・霊の振る舞いと、それとの付き合いに関する実践報告」であった。

青森県の津軽地方に長く居住してきたとはいえ、カミサマとの接点が乏しい筆者に「カミサマの代理」を務めることは到底無理なことと思われた。しかしながら大会長の心意気に心打たれたし、長年魅了されてきた津軽の地について何かを語ってみたいという欲求も自分の中にはあった。そこで「カミサマの代理」は難しくとも、極力シンポジウムの趣旨に沿った発言ができるよう、カミサマの語りや営みをできるだけ原形を崩さずに提示する方向で発表の準備を進めることとした。

準備期間中、関係者から多くの協力を得ることができたにも関わらず、筆者の力不足で当日は拙い発表をすることとなった。しかしなが

ら、近年、津軽のカミサマについてこれといった調査報告がないなかで、今回は、2015年現在の津軽地方におけるカミサマの活動の一端を報告することはできたものと考えている。

以下は2015年12月19日、姫路市で開催された公開シンポジウム「魂との出会いを語る」で使用した口述原稿を、誌上発表に適した表現となるよう手直したものである。解説が不十分と思われる箇所には、適宜「注」を施し説明を加えた。カミサマに関する基本的知識は、主として池上良正著『民間巫者信仰の研究——宗教学の視点から——』（1999年刊）から学んだ。このため同書から多くの引用をさせていただいている。カミサマに関する宗教学からの詳細な情報を求められる向きは、同書を紐解いていただきたい。

1. はじめに

青森県で精神科医をしている吉村と申します。今日は青森県の津軽地方で巫業を営む民間の巫者についてお話をさせていただきます。私は宗教者でも宗教学者でもありませんので、力不足ではありますが、30年近く津軽地方に住んでおりますので、この土地で見聞してきたことを中心に報告をさせていただきます。

実は、この領域の研究につきましては宗教学

* 〒036-8151 青森県弘前市北園1-6-2

の池上良正先生という大家がおられまして、1970年代から80年代に集中的に調査をされ、多くのすばらしい研究成果を残されています。今日の私の発表は、これら池上先生のご研究の恩恵にあずかっているものであることを、まずはお伝えしておきたいと思えます^(注1)。

ただし、今回は、2015年現在の生の情報を報告することができるよう心がけて準備してきました。自分で足を運んで現場を見てまいりましたし、特定の学問的立場から解釈するようなこともしておりません。生の素材から何か奥深いものを汲み取っていただければ幸いです。

2. 津軽と民間巫者

今日の話の舞台である青森県は、県中央を南北に走る奥羽山脈で東西二つの地方に分けられています。日本海側を津軽地方、太平洋側を南部地方といい、それぞれの風土や文化はかなり異なっています。津軽には、岩木山という美しい独立峰がそびえており、この山はりんご、桜と並んでこの地方のシンボルとなっています(図1参照)。まことに感覚的な話ではありますが、私にはこの山が望まれる津軽という地方には、一種独特な「気」が流れていると感じられます。私はこれを「シャーマンを生むような気」と表現しています。この土地の気をそのように表現しているのは私だけなのでしょうが、



図1 津軽の秀峰 岩木山

私にはどうしてもそのように感じられるのです。そして実際、沢山の民間の巫者が津軽にはおられます。彼らを当地では「カミサマ」と呼んでいます^(注2)。

一体どれくらいの数のカミサマが津軽におられるのか、近年の報告はなく、確かな数はわかりません。とはいうものの過去にいくつかの報告があります。最も参考になるのは1980年代末に津軽地方に100名を越すカミサマの宗教者がいたであろうとする池上の見解です^(注3)。25年以上前の推定数ですが、かりに今も津軽に100人おられるとすれば、郵便局2つがカバーする住民数に約1名のカミサマがいるといった計算になります。カミサマの数は減少傾向にあるのではないかと推測しますが、私が自転車で出かけられる程度の距離に、私が把握しているだけで3名のカミサマがおられますので、現在も身近な存在であることに変わりはないと思えます。日本中に類似の営みをされている霊能者は沢山おられるでしょうが、この濃厚な分布が津軽のカミサマの一つの特徴だと思います。

3. カミサマとその営み

では、カミサマとは一体どのような人たちで、いかなる営みをしているのでしょうか。まず、これらをかいつまんで説明しておきたいと思えます。

カミサマとは東北地方に広く分布している民間巫者の呼び名で、彼らは神々との直接的かつ濃厚な関係を持ち、授かった霊能力を使って人々を救う営みをしています^(注4)。学術的にはカタカナ書きにして超越者であるところの「神様」と区別していますが、日常会話の中では、話の流れからどちらを指しているのかを判断しています。カミサマの多くは30代から40代以降の女性で、普段の生活はなんら一般人と変わりはなく、家事、育児、家業などにいそしんで

います。カミサマとして看板をあげているわけではありませんから、一体どこにカミサマがおられるのかは口コミでしかわかりません。彼らはかつては「ゴミソ」と呼ばれていましたが、これは「御夢想」から来たのだらうという説があります。実際、カミサマは夢で神託を得ることが多く、カミサマにとって夢は「異界との通路」として重要な意味を持つことが多いのです。

カミサマにはそれぞれ仕える神ないし神々がおられます。赤倉大神^(注5)、龍神、稲荷神、神明(天照大神)などで、それらの神々から神託が降りるのです。お告げをくださるのは神々だけではありません。薬師如来、弘法大師、不動明王、観音など仏教関係の超越者もまた救いの手を差し伸べてくださいます。ここで注意しておきたいのは、神や仏と言いましても、神道と仏教という個別の宗教が必ずしも前提とされているわけではないということです。神も仏も「人を超えた存在」という枠組みの中で捉えておいた方が、カミサマの語る神仏という言葉の意味に近いでしょう^(注6)。もう一つ注意しておかなければならないのは、カミサマたちの言う神仏とは、人間の甘えをいつでも許し、受容してくれるような超越者ではないということです。普段は人々を守り、教え諭し、救ってくれる神仏も、事情によっては人間に対して怒り、怨み、ねたみといった感情を抱き、災いの原因ともなりうるのです^(注7)。

いずれにせよ、カミサマたちはこうした神仏との関わりの中で人助けの営みをされているわけですが、その実践内容は多岐にわたります^(注8)。今日は彼らの巫業の中でも、とりわけ一般の人々にとって重要な意味をもつと思われる「災因の判断」と「対処法の教示」に的を絞って話を進めていきたいと思います。「災因の判断」と「対処法の教示」とは、つまるところ、「困りごとの解決」のことで、実際の手順はおよそ次のような流れになります。

まず、悩みや苦しみを抱えた依頼者がカミサマの自宅を訪問して助けを求めます。相談の内容は、慢性的な体調不良や子どもの問題、金銭トラブルなど何でも良いのです。カミサマは太鼓を叩くなど何らかの儀式をして神仏からの助言を求めます。これに応じ、神ないし仏は、依頼者の抱える苦悩の原因や対処法に関するメッセージ、あるいは解決のためのヒントなどをカミサマに与えてくださるのです。カミサマによってメッセージの受け取り方は異なっており、見えてくる人もいれば、聞こえてくる人もおり、「心に入ってくる」と表現される方もおられます。いずれにせよ、得られた神仏からの返答をふまえ、カミサマは依頼者に災いの原因やそれへの対処法を教示するのです。

一般的な問題解決の流れは以上のようなものでありますが、現場で生じる現象はもっと多彩です。神がカミサマの口を借りて依頼者に直接語り出す、つまりカミサマが神憑りとなって話を始める場合もありますし、霊、すなわち死霊や生霊、あるいは動物霊などがカミサマに何かを伝えてくることもあります。これら霊たちの発するメッセージもまた問題解決のための重要な手がかりとなるのです。

このように、カミサマの巫業の場では、依頼者個別の悩みに対し、神仏や霊が直々にその原因や解決法に関する具体的なメッセージを届けてくれるのです。これは一般の神社仏閣ではなかなか望めない貴重な救いの手立てだと思えます。カミサマの巫業の場は、人々と神・仏・霊が「救い」をテーマに間近にまみえ、言葉を交わす、生々しい「出会いの場」とも言えるのです。

4. Kさんの人生経緯

それではここから、Kさんという女性のカミサマを紹介していきたいと思います。カミサマたちは、皆、人生経緯が異なりますし、仕える

神も、神から授かった能力もまちまちです。このため、それぞれ独自の活動を行っています。その中でKさんを特に選んで紹介しますのは、彼女が私にとって身近な存在であり、惜しみなく情報を提供してくださる方でもあるからです。彼女独自の手法や体験はあるものの、多くのカミサマに共通した性格を彼女の活動の中に認めることができるように思います。ただし、彼女とは異なるやり方や考え方をされているカミサマもおられることはお断りしておきたいと思います。

Kさんは79歳とご高齢で、小柄で細身の女性ですが、よく笑うとても明るい女性です。沼地跡で生まれていますが、これはKさんにとって自分の出自が龍神と何らかの関係があるということの意味しているようです。カミサマはその土地に昔何があったかということを重視することが多いのです。

5歳頃に、毎晩眠ると天に昇り、10名ほどの神仏や僧侶、神主らの声を聞かされていることに気がつきました。「何かを教えようとしていたのかもしれない」とKさんは今は考えていますが、当時は「理解しよう」とか「覚えよう」などといった意識はなく、ただ耳に入ってくる声を聞いていたそうです。明け方になると、彼女は鳥になって天から舞い降り目を覚ましていたと言います。こうした夢を見てはいましたが、日常生活に特別なことがあるわけでもなく、特殊な能力があったわけでもありません。20歳になると農家に嫁ぎ、主婦として家事、育児にいそしみ、農業にも従事されます。つまりごく一般的な家庭生活、社会生活を送っていたわけです。しかしながら例の夢はこうした日常にあっても途切れることなく続いていたと言います。

そして53歳となったある日、いよいよ神から「十分修行したから一人のできる。書いてやれ」と告げられます。召命体験です。神に仕え、自分の使命を果たすよう言い渡されたということです。「十分修行した」というのは夢の

中でずっと話を聞かされてきたことを意味するのだろうとKさんは言います。「一人のできる」とは、師について学ぶ必要はないということです。「書いてやれ」という言葉には若干説明が必要です。これは神が彼女にお告げの受け方を指示しているのです。Kさんの場合、神仏が彼女の右肩に降りてきて彼女にお告げをするのですが、これと並行して右手が自然に動き出し、お告げが筆記されるのです。召命の折に、この彼女独特のお告げの受け方を神が指示してきたわけです。召命体験以後、Kさんはこういった特殊な能力を急速に獲得し、以後26年間、カミサマとしての営みを続けてこられたのです。

5. Kさんの営み

では、ここから具体的な彼女の依頼者への対応とその際の体験などを紹介していきたいと思えます。

依頼は事前に電話で受けることが多く、相談内容は依頼者本人の体調不良や家族の悩みが中心です。この際、依頼者の住所を聞き出しますが、これが情報獲得の大きな手がかりとなります。住所がわかればその土地のことや先祖のことなどが次々とわかってくるのです。例えば「その土地でかつてどういうことが起きたのか」とか、「何代前の先祖が何をどうやって死んだのか」といったことがわかるのです。先にお話したように、神仏が右肩に降りてきてこれらの情報を提供してくれるのですが、それは言葉によるお告げだけでなく同時に筆記されるものです。ただ、Kさんは決して聞こえてくることをメモしているわけではありません。実際はその逆で、「書けば聞こえてくる」と表現される独特な体験なのです。相談内容が健康問題の時は薬師如来が降りてくることが多く、そのほかの問題では高山稲荷神社、川倉賽の河原地蔵尊、岩木山神社、猿賀神社など津軽の神社仏閣

にまつわる神仏が降りてくることが多いそうです^(注9)。

こうしてお告げを受けているうち、例えば1時間ほどしてから依頼者が彼女の家に到着します。もし、この時点で情報がまだ不十分であれば、Kさんは依頼者をマッサージします。これも彼女が神から教えられた手法で、マッサージをしていると「障っているもの」、例えば浮かべられないでいる死者が、「俺、自殺したんだよな」などとKさんの右肩で話をし始めるのです。このようにして「憑いているもの」からその事情を聞き出していくわけです。興味深いことに、Kさんは依頼者の体を紙に描いても依頼者の体のどこに何が憑いているのかわかるそうです。「頭に不動明王、肩に自殺者……」といった具合に次々とわかるそうですが、この方法はマッサージと同じ原理に基づいているのだと彼女は言います。いずれにせよ、こういった手法を用いて依頼者の抱える問題の原因ならびにその解決法を明確にしていくわけです。ここでKさんは労を惜しまず、彼女の表現では「細かく砕いて」調べ、正確な情報を得よう努力されます。言われてみれば当然ですが、そ

れは「正しい情報に基づいて対応しないと問題がおさまらないから」なのだそうです。

最後のステップが問題解決の手続きです。Kさんが得られた情報をもとにご自宅で対応される場合もありますが、障りとなっている神仏を家庭で丁重に祀るよう依頼者に指示することもあります。また、依頼者に津軽各地の神社仏閣に参詣し、そこでお祓いを受けたり、死者を供養したりするよう指示することもあります。なかでも高山稲荷神社と川倉賽の河原地蔵尊はKさんがしばしば依頼者に参拝を促す霊場ですので、そちらでの営みについては最後にあらためて触れたいと思います。

6. 神・仏・霊の振る舞い

ここで、Kさんのもとで、神仏および霊がどのような振る舞いをして人々に働きかけてくるのかを少し具体的に見ていきたいと思います。

まず、Kさんの祭壇をご覧ください(図2参照)。彼女の家はごく一般的な住宅ですが、その8畳ほどの部屋にこの祭壇があります。贅沢な作りではありませんが、よく手入れされたき



図2 Kさんの祭壇



図3 著しく変形したロウソクの例

れいな祭壇だと思います。カミサマの祭壇の前には太鼓が置かれていることが一般的ですが、ここにはありません。彼女によれば「太鼓を叩かなくても書けば上から教えるのだから太鼓はいらない」とのことです。さて、この祭壇には、Kさんが召命を受けて間もない頃、「出雲から来た」と語る白い着物の女性が立っていたそうです。ほかにも弘法大師や山の神、巨大な鳳凰などが祭壇上に現れました。白い着物の女性は夢にも出てきて彼女に御幣の作り方などを教え、弘法大師は夢でKさんを国内外の聖地に案内してくれたといいます。突然の召命で宗教家となったわけですから誰かの手ほどきが必要です。この「誰か」が人間ではなく神仏であるということがカミサマたちの特徴の一つでもあります（注10）。カミサマとなった後も彼女は神仏の助言や励ましを受けながら自身の霊能力を向上させてきました。当初は夢が重要な情報源でしたが、神仏の指導を受けながら研鑽を続けるうちに、夢を介さずとも情報が得られるようになったといいます。このような神仏からの指導や助言はご高齢となられた現在も続いており、巫者としての彼女の生活を支えています。神仏によるKさんの教育は少なくとも幼少期には彼女の夢の中で始まっていたとみられますから、Kさんは生涯を通じてカミサマとして神仏のお育てにあずかってきた人だと考えられるのです。

話を祭壇に戻します。Kさんの祭壇のロウソ



図4 神・仏・霊のメッセージが記されたノート

クには著しい変形が生じることがあります（図3参照）。Kさんはこの現象を「相談事によっては龍が出る」と説明されます。ロウソクの顕著な変形は龍神が現れたことを意味しているというのです。ただし、龍神が現れたから「良い」とか「悪い」とかいうわけではなく、それは「何かを教えている」のだから、その意味内容を確認したければ「書いて調べればわかる」のだそうです。こうした現象にも異界からのメッセージが込められているというわけです。このロウソクの変形が科学的に説明のつく自然現象なのか、何らかの霊的意味合いをもった超自然現象なのか私にはわかりません。しかし、依頼者に「この場でこの世ならぬことが起きている」との強い感動を与えることは間違いのないでしょう。このような非日常的現象を伴う異界からのメッセージは、とりわけ強い説得力をもって依頼者の心に迫ってくるのです（注11）。

次に、Kさんのノートを見ていきます。神・仏・霊から告げられた内容がこのように書き連ねられるのです（図4参照）。若干写真が切れているのですが、画面上部に久渡寺、猿賀神社、胸肩神社、善知鳥神社、小栗山神社など、津軽の神社仏閣の名が続々と出てきます。彼女自身は「ネットワーク」という言葉は用いませんが、どうやら津軽一円の神社仏閣にはネットワークのようなものがあり、彼女の仕事はそのネットワークとつながっているようなのです。ノートに記さ

れた浮かばれぬ死者たちの訴えは様々です。「むかつく」、「くたばれ」と怒りをぶつけてくる者もいれば、「謝れ」、「拝め」、「助けろ」、「話つけろ」などと要求してくる者もいます。「孫に憑いてやる」と脅してくる者、「放っておかれて悔しい」と心情を吐露してくる者、「何月何日を命日にして位牌堂に入れてください」と具体的な依頼をしてくる者もいます。普段は人々を守り導く神仏も、粗末に扱われた場合は死者同様に感情的な態度で依頼者に迫ります。こうした彼らの情動が、しばしば「怨念」と表現されるものなのでしょう。しかしながら、これらの言葉によく耳を傾けてみますと、いずれの訴えにも「わかってくれ」、「助けてくれ」といった切実な気持ちが込められていることがわかるのです。このような彼らの振る舞いをKさんは「ちゃんとやってもらいたくて出てくるんだべ」と簡潔に表現されます。

7. 事例

では、神・仏・霊のこうした訴えがどのような形で届けられ、どのように対応されていくのかを事例を通して具体的に見ていきたいと思えます。次の3例はいずれもKさんから伺ったものですが、プライバシーに配慮し、内容理解を損なわない範囲で事実関係の改変を行っています。また、巫業の細かい手続きについての説明は割愛しました。

[事例1]

50代の女性。10年ほど前から体調が思わしくなく、仕事をすることもできなかった。助けを求めてあちこちで相談したが「原因がわからない」と言われてきた。Kさんに相談したところ、龍神が出てきて「人の頭の上に家建てて」と不満を述べ始めた。この女性の家は沼の埋立地に建てられていたが、ちょうど蛇の住んでいた穴の上に位置していたのである。龍神から

「氏神として祀ってくれれば、体調は良くなる」と言われたため、龍神を祀って見たところ本当に治ってしまった。今はすっかり元気になり仕事も順調である。

[事例2]

真面目で良い子だった高校生の娘が、突然「人を殺してみたくなった」と言い始めた。驚いた母親がKさんに助けを求めてやってきた。調べてみると、不慮の事故で死んだ母親の弟が怒って出てきて「食うものも着るものもない。供養されていない」と述べ、Kさんに不満を訴えた。母が寺であらためて亡き弟の供養をしたところ、娘はもとの穏やかな女学生に戻り、不穏なことを口にすることもなくなった。

[事例3]

中学生になってから孫の素行が急に悪化し、警察沙汰まで起こすようになった。Kさんに相談すると、稲荷神が出てきて「3回も引越して。回覧板を回しているんだ」と言って怒っていた。3回も引越しをしているのに土地の神に挨拶をしない無礼な行為に神々が怒っているというのである。（「回覧板を回している」というのは、神仏が回覧板で情報を共有していることを意味する。この回覧板の話はKさんの語りにはしばしば出てくる。）このため、これまで住んでいた土地の神社と回覧板が回ったすべての神社に挨拶して回ったところ、神々は了承してくれ、孫の素行は良くなった。

どの例も、依頼者の苦悩の原因を探る過程で神・仏・霊の訴えがKさんによって代弁され、依頼者側がこれらの訴えを聞き入れることによって問題が解決するという形です。心理学を学んでいると、事例2、3などは子どもの成育歴や家族背景などを検討し、そこに問題の原因や解決の鍵を求めたくなります。しかし、Kさ

んの場合、災いはあくまでも「神・仏・霊の側の事情」によるのであって、彼らの訴えに耳を傾けることによってはじめて解決への道が開かれるのです^(注12)。

8. 神・仏・霊との交わりを巡って

以上をふまえ、依頼者とカミサマ、そして神・仏・霊がどのような意味や性質をもった交わりをしているのかを、Kさんの巫業における「災因と救済」の仕組みに着目しつつ考えてみたいと思います。「災因と救済」は次の3点にその要点を整理することができるように思います。

第1に、「主たる災因は死者の供養不足や神仏に対する非礼」ということです。これは上記3事例については明らかですが、Kさんから伺った他の事例についてもほぼ共通して認められた特徴です^(注13)。

2番目に、「浮かばれない霊を供養したり、粗末にした神仏を祀りなおしたりすることによって障りを取り除く」と言えるでしょう。彼らの意を汲み適切に対応することが障りを除くための鍵なのです。

3点目は、「障っている者をおさめることで依頼者も救われる」ということです。もともと苦悩を抱えて救いを求めたのは依頼者でした。しかし、よく調べてみると、先だって苦しんでいたのは神・仏・霊の方だったのです。そして、彼らの気持ちを鎮めることで、依頼者もまた同時に救われるという構造があるのです。Kさんは「(神・仏・霊は)人間と同体なり」と聞かされることがあるそうです。それは神・仏・霊が人と同じような感情を持っているという意味にも受け取れますが、神・仏・霊が救われることと人間が救われることが同時であるといった事情をも示しているように思われます。

このように整理してみると、人々とカミサマ、そして神・仏・霊との交流には、ある目的

を持った動きがあるように思われてきます。人間界にだけ着目すれば、カミサマの営みは、人々の苦悩を除去する他の多くの対人援助の仕事とさして変わりはないように思われます。しかし、神・仏・霊の住まう世界にまで視野を広げて見たならば、カミサマの営みとは、人々と神・仏・霊が共に救われていく世界を開いていくことだと気づかされるのです。Kさんは障りを取り除くのは「安定感を出す」ためだと言われます。「安定感を出す」とか「安定感が出るように」といった表現をKさんは好んで使われるのです。神・仏・霊の住まうこの世界が不安定になっていても、察しの悪い我々にはわかりません。自覚されるのは自分の苦しみばかりです。そこで、カミサマが神・仏・霊の代弁者となって世界のひずみを指摘し、回復の手立てを示してくれているのです。病氣平癒や家内安全といった現世利益を目的とする信仰は、時に低いものと見なされます。しかし、こうしてみると「現世利益」とは人間の欲望に着目した時の表現であって、その本来の目的は、神・仏・霊と共有されたこの世界における「安定感の取り戻し」だと言えそうなのです^(注14)。

ただし、今ここで私が述べたような包括的な説明や意味づけの類は、Kさんにとってはあまり重要なことではないようです。何らかの仕組みとか原理とかに私が気づいて「こういうことでしょうか」とKさんに尋ねても、Kさんは「まず、そういうことだな」と、「とりあえず否定はしない」という程度の返事しかされません。そして、「1たす1は2みたいな風にはいかなんだよ」と私に忠告されます。彼女は単に「自分は神仏に教えられたとおりやるだけ」と言うのです。原理・原則の発見とか、ましてや教義の構築などといったところに彼女の営みの力点はないのです。真相はあくまでも神仏が把握しているのであって、彼女はそのつど神仏が教えることから学び、その指示に従っている



図5 高山稲荷神社 拝殿



図6 キツネの石像

だけなのです^(注15)。

9. 高山稲荷神社と川倉賽の河原地蔵尊

神・仏・霊の障りを取り除くために、依頼者はKさんから津軽各地の霊場に出向いてお祓いを受けたり、死者の供養をするよう勧められたりすることがあります。祓いや供養の場としてKさんの口からしばしば出るのが高山稲荷神社と川倉賽の河原地蔵尊ですので、最後にこの二つの霊場について触れておきたいと思います。

高山稲荷神社は津軽地方の稲荷信仰の拠点で、つがる市牛潟という日本海に隣接した町に位置しています(図5参照)。この神社は、海岸沿いということもあって、漁業関係者の信仰が篤いといった特徴があります。神社が鎮座するのは砂浜沿いの高台で、ここは古くから民間信仰を含む多種多様な信仰の聖地としてあがめられてきました。カミサマのなかにも高山を信仰されている方は沢山おられたのです。この地の霊的求心力によるのでしょうか、境内には本社のほかに多くの小神祠やキツネの石像が祀られています(図6参照)。

この地域にはかつて沢山のキツネが住んでおり、漁師さんたちはキツネの鳴き声や供えておいた魚のどこに「ウケがついたか」、つまり魚の体のどこがかじられたかで、漁の予測をしたり、どこに網を張れば良いかを占ったりしてい

たといいます。こうした事情もあって、稲荷信仰とは言っても、もとはキツネ信仰とも言えるべき信仰形態があったものと考えられています^(注16)。このため通常の稲荷神社よりも「キツネの仕業」などといった動物霊がらみの障りと結びつきやすい素地がこの神社にはあったのではないかと思います。動物霊などの「霊の障り」を災因と捉えるカミサマたちにとって、高山稲荷神社が重要な依頼者の紹介先となるのは当然のこととも思われます^(注17)。

こうした史的背景とは別に、動物霊と結びつきやすい事情として、当のキツネが自分の納まる場所として高山稲荷神社を指名してくるという話も耳にしたことがあります。私の知る事例では、他の稲荷神社にキツネを納めようとしたところ、キツネがカミサマに憑依して跳び回り、「そこに納まる私ではない」と言い抵抗したそうです。このため遠方ではあったけれど高山稲荷神社に納めることにしたところ、キツネはこちらは了承したというのです^(注18)。

過日、高山稲荷神社の神職の方にお話を伺いましたところ、やはりかなりの数の人が、あちこちのカミサマの助言によって、祟りを鎮めたり憑きものを落としたりするために高山稲荷神社には来られるそうです。神社ではすべての依頼に応じ、事情に即した祝詞を用いて拝殿で祓っておられるとのこと。お話によると、カミサマの稲荷信仰は本来のものとは「ちよっ



図7 川倉賽の河原地蔵尊 地蔵尊堂



図8 各村地蔵安置所

と違う」けれど、神職は「人と神とのなかつりもち」が務めなのだから、祈祷をして人々の願いを神様にお伝えしているとのことでした^(注19)。その効果は「人による」とのことです。

次に、川倉賽の河原地蔵尊を紹介いたします。ここは五所川原市金木町にある平安時代開創の古い地蔵堂です（図7参照）。高山が津軽の稲荷信仰の拠点ならば、こちらは津軽の地蔵信仰の拠点と言って良いでしょう。ここもまた高山稲荷神社同様、強い求心力をもった霊場で、地蔵尊堂内の地蔵安置所には約2000体ものお地蔵様が納められています（図8参照）。

地蔵尊堂のほかにも水子地蔵堂や人形堂などがあり、人形堂には未婚のまま亡くなった方を供養するための人形が奉納されています。亡くなった若者が男性の場合には花嫁人形が、女性の場合には花婿人形か夫婦人形が納められるのです。これは「適齢期になればあの世で神が結婚させてくれる」という考えにもとづいているのですが、これらの人形の奉納にはカミサマが関わっている場合がかなりあるのです。例えば、「若くして病気で亡くなったお姉ちゃんが浮かばれないでいるんだよ」などとカミサマが家族に伝え、人形の奉納を勧めるといったことがあるわけですね。

死者供養のための法要は、本尊の大きなお地蔵様の前で行われます。ここでお勤めされている僧侶に伺いましたところ、やはりあちこちの

カミサマに促されて多くの方々がこの地蔵堂に集まるそうです。お地蔵様は六道で迷っている者を皆救ってくださるのですから、どのような依頼にも応じ、いずれも『地蔵菩薩本願経』を唱えて供養しておられるそうです。依頼者が本来求めていた救い、例えば体調不良の改善とか家庭内の問題の解消といった現実的な問題への効果については、「あった、なかった、双方ある」とのことです。

高山稲荷神社、川倉賽の河原地蔵尊のいずれにも現在もカミサマの促しで参拝される方は多数おられ、各霊場では参拝者の希望に応じた祈祷や供養が実施されており、その効果は様々ということになります。ただし、効果の判定はそう簡単ではないということが、Kさんとの対話を通じて私にはわかってきました。今日はわかりやすさを優先して、1回の対応で改善した事例を提示しましたが、実際にはもう少し複雑な事情があるようなのです。Kさんによると、生まれつき「因縁一杯背負った人」や「何でも引っ張る憑かれやすい人」がいて、神仏も最初から「これは沢山やらないと駄目だなあ」と厳しい見通しを立てることもあるそうです。また、Kさんは「期待する結果が出ずにあちこち歩き回る人もいますが、それ自体にも何か意味があるんだよ」とも言われます。人には理解できない深い事情があるわけで、効果の有無をあまり単純に決めつけることはできないようです^(注20)。

10. まとめ

さて、色々な話をしてきましたが、最後に今日お話しいたしましたことの要点を列挙し、まとめとさせていただきます。

津軽のカミサマについて、Kさんを例にあげて紹介してきましたが、Kさんの人生を振り返りますと、彼女は神仏によってカミサマとして育てられてきたように見えました。

依頼者の災いの原因を探る過程では、神・仏・霊がその満たされぬ想いや要求をKさんを通じて依頼者に訴えていましたが、彼らの意を汲み鎮めることが依頼者が救われることでもありました。

障りを除くための祓いや供養の場面では、津軽の神社仏閣がカミサマの巫業を支えていることが明らかとなりました。

以上です。ご清聴ありがとうございました。

謝辞

本発表に際し、惜しめない協力をしてくださいましたKさんに深く感謝いたします。Kさんは本報告の口頭および誌上発表につきましてもご快諾くださいました。また、高山稲荷神社、川倉賽の河原地蔵尊で快く調査に応じてくださいました皆様にも厚くお礼申し上げます。赤倉沢をご案内くださったYさん、地元の情報を提供してくれた弘前愛成会病院の職員にも謝意を表します。

注

- 1) 津軽のカミサマについて池上が包括的に論じた代表的文献として、『津軽のカミサマ——救いの構造をたずねて』（池上, 1987）、『民俗宗教と救い——津軽・沖縄の民間巫者』（池上, 1992）、『民間巫者信仰の研究——宗教学の視点から——』（池上, 1999）の3著がある。筆者の調べた限り、1999年の池上の著作以降、カミサマの活動に関するまとまった研究報告はない。
- 2) 青森県の民間巫者はイタコ系とカミサマ系に二大別され、いずれも青森県全域に分布している。か

つてイタコには視覚障害をもつ女性の生活手段といった民間福祉的な意義もあったが、戦後、社会福祉が整備されるなかで視覚障害者に他の生活の道が開かれたこともあって、その数は激減した。一方、カミサマは現在もかなりの人数の活動が確認できる。

- 3) カミサマたちを統括する仕組みや組織は存在していないため、その実数を把握することは難しい。そもそも、カミサマか否かの判定は、本人の自覚と社会の評価に支えられており、一定の判定基準があるわけでもない。こうした事情から疑似カミサマともいべき人々も存在しており、池上の推定数は「境界的な領域をも含んだ総数」が示されたものである（池上, 1999, pp.65-66）。なお、津軽地方のカミサマの人数については、他に中村によって1955年から1960年に行われた調査による78名（中村, 1961）、江田によって1970年に発表された116名との報告がある（江田, 1970）。
- 4) 池上はカミサマを暫定的に以下のように定義している。「病氣、家庭の悩みなど、肉体的・精神的な苦悩をきっかけに信仰の道に入り、神霊や祖霊との対話や独自の『修行』などを続けるうちに、苦難を克服するとともに特殊な霊能力を授かったと周囲の社会からみなされた宗教者」。ただし、「例外事例も多く、単純な一般化には困難が伴う」としている。（池上, 1999, p.59）
- 5) 赤倉大神（赤倉神）については、池上の著作からその概要のみまとめ、以下に記しておく。岩木山山頂付近から北東方向に、赤倉沢という溪谷が伸びている。ここは中世以来の修験道と結びついた行場であったことはほぼ間違いなく、近代には女性を中心としたカミサマ系巫者の修行場として知られるようになった。赤倉大神とは主にこの赤倉沢を本拠地として活動するカミサマたちの礼拝対象の一つであるが、その実体はカミサマごとに解釈が入り乱れ、鮮明な像を結びにくい。典型的には、長身で髭を生やしマサカリを手にした山神のイメージとして捉えられており、赤倉大権現、赤倉山神、赤倉様などとも呼ばれる。（池上, 1987, 1999）
- 6) 池上はカミサマの世界におけるカミ・ホトケの区別を「あえて概念化すれば、生者の幸福を祈る『生の儀礼』と、死者の安寧を願う『死の儀礼』という区分に、ゆるやかに対応している」と説明している（池上, 1999, p.274）。
- 7) 池上によれば、カミサマ信仰における神は、「おまえを救いきれなくて、神も苦しいのだぞよ。分かってくれよ」とか、「私の苦勞がおまえたちには、まだ分からないのか」と語るなど、人間に対して「察

- し」を求め、甘えかかってくる存在でもあるという。それゆえ、人間側の「察し」が欠如した場合、怨みやねたみといった攻撃的態度に転じる可能性があるのである。ただし、カミサマ信仰の中にあっても「赤倉神のように多くのカミサマから『タカガミサマ (高神様)』として受け入れられている神は、相対的に甘えの葛藤から自由な存在としてイメージされることが多い」という。人間に「甘え」の感情を抱かぬ神は、攻撃的態度に転じることもない。赤倉神など一部の神はそうした存在に近づいているのである。(池上, 1999, p.295, pp.330-331)
- 8) カミサマの営みは、集団行事と依頼者への日々の応接に二大別される。前者は、大祭、春祈祷、オシラ神講、集団登拝など定期的あるいは不定期の催しであり、後者は依頼者の求めに応じてそのつど行われる祈願、予示、判断、処方、口寄せなどである(池上, 1999, pp.102-111)。近年は、集団行事にみられる多人数を対象とした公の場での巫業は減少傾向にあると思われ、巫業に占める後者の割合が相対的に増加しているものと推測される。
- 9) Kさんに情報が届けられるまでの過程には複数の神仏が関わっている。Kさんによれば、「すべてを見ている神」がおり、さらにこの神の膨大な情報を「編集する神」がいる。そしてこの編集された情報の中からKさんに必要な情報を引き出して提供してくれるのは、依頼者の問題の「主任」にあたる神仏であるという。この主任がKさんの右肩に降りてくるのである。こういった役割構造の認識はKさん独自のものであり、カミサマ一般に共有されているものではない。
- 10) 同じく青森県の代表的な民間巫者であるイタコの場合、師匠にあたる先輩イタコに弟子入りし、数年間の指導を受けた後にひとり立ちする。ひとり立ちに際して執り行われる成巫儀礼を「カミツキ」、「ユルシ」などと呼ぶが、この儀礼も師弟関係に強く支えられたものである。江田は、ある女性カミサマがイタコとカミサマの違いについて「イタコは師について習うが、ゴミノは神から自然に教わる」と述べた、との記録を残している(江田, 1970, p.333)。
- 11) 2015年9月、筆者が岩木山赤倉沢の別のカミサマの霊堂にお邪魔した際も、筆者の目の前で図3とは様相の異なるロウソクの変形が生じた。また、後日、同霊堂において長期にわたり大切に保管されてきた貴重なロウソクの変形例も拝見させていただいた。この霊堂のカミサマも、ロウの変形は龍神と関係があるものと理解されていた。こういった巫業の場で生じる物質の変化ならびにそれらの宗教的解釈について関心を抱いたが、今回は関連資料を発見することができず、調査が及ばなかった。
- 12) ただし、こうした事例を一つ一つ検討してみると、少なからず人間の側からすれば理不尽と思われる状況がある。例えば事例1の女性は、人として倫理道徳に反したことは何もしていないし、家族の中でこの女性にだけ障りが生じる事情もわかりかねる。事例3について言えば、神々への挨拶なしに転居を繰り返しても無事に暮らしている人がいることはどう理解すれば良いのか。こうした不条理についてKさんに質したところ、「その人にはそうしたことが起きなければならない事情があったんだよ」、「(お祓いや供養などを) やってくれそうな人に出てくるのであって、全然やる気のない人には出てこないよ。短気で威張っているような人にはそう出てこない」との説明であった。人間側の道理には合わない神・仏・霊の側の事情があるのである。
- 13) ここで指摘した「死者の供養不足」と「神仏に対する非礼」という二つの災因は、Kさん以外のカミサマにも広く認められるものである。しかし、おのおの個別に成巫し一定の教義をもたない彼らの述べる災因は多様で、時代によっても推移するとの指摘がある。池上は1999年の著書で、カミサマの語る災因が、動物霊を含む多彩な形態から先祖の因縁罪障を主としたものに推移したことを示唆する資料を提示している(池上, 1999, pp.306-310)。また、2007年の公開講演会において、霊能者の語る災因が、1990年代以降、先祖や死者によるものに加え、「個人の生まれ変わりを前提にした前世の物語などが語られるようになってきた」と指摘している(池上, 2008, p.23)。
- 14) 本節で述べた筆者の見解は、より専門的な立場から池上によって詳細に論じられている。池上は民間巫者という存在の捉え方について、「互酬性の倫理」の観点からさらに考察を深めている。以下に池上(1999)を引用しつつその概要を記す。ジョージ・フォスターにれば、近代産業社会では怨念や妬みは下劣な感情として抑圧され、「ライバル意識」といった生産主義的な自由競争原理に転化される。しかし、伝統社会では怨念や妬みの表出はある程度許容され、集団内の貪欲を抑え平準化の倫理維持に役立ってきたのである(互酬性の倫理)。ジェーン・シュナイダーは、この「互酬性の倫理」を生者のみならず土地の神霊・動物霊・人間の死霊にまで拡大して捉え直した(アニミズムの倫理)。こうした視点に立つならば、「民間巫者とは、今日でもなお『互酬性の倫理』を維持する感性に固執し、依然として神霊・死霊・祖霊・動物霊などを含むコスモス全体の調和と、その平

準化の維持に鋭敏に対応する宗教者、として捉え直すことができる」。この「互酬性の倫理」は、広義の人間中心主義に対する抑止力としても作動し、人々に「慎み」の感性を埋め込んできたのではないか。(池上, 1999, pp.295-297, pp.436-445)

- 15) 池上は民間巫者を『『靈威的次元』の自律的主導性の内に生きる宗教者』と捉える視点を提示しており(池上, 1999, p.9)、カミサマの成巫過程を『『靈威的次元』の力や意味の個人的な顕現に圧倒され続けるなかで、当人の意志や計らいに対する『靈威的次元』の優位性を徐々に受容していく過程』と表現している(池上, 1999, p.71)。また、ある程度まで社会的な認知を得たシャーマニズムの宗教者の場合、「本人には、けっして自分が勝手気ままに離脱しているといった認識はありません。むしろ、それは神とか死者にがっちりと主導権を握られていて、自分自身はそれに忠実に従っているだけなのだ、という確信を強くもっています」と述べている(池上, 2008, p.10)。(ここで言う「離脱」とは、「通常の現実感覚ではとらえきれない靈威的な意味や力の次元への離脱」を意味する。)これらの指摘はKさんにもよく当てはまっている。
- 16) 森山は「高山にかぎらず津軽の漁村一帯には広く稲荷信仰が分布しており、これら漁民の信仰は、高山稲荷の場合と同様に、狐による漁業の吉凶予知が根源となっているが、要するに、高山稲荷の存在は、津軽の漁村の素朴な狐信仰が、日本海の七里長浜に連なる砂丘の高地を聖地として集約されたものであろうと考えられる」と述べている(森山, 2000, p.293)。(引用文中「日本海の七里長浜に連なる砂丘の高地」とは高山稲荷神社の所在地を示している。)
- 17) 古い記録であるが、直江は、カミサマがキツネの祟りへの対応として弘前市の白狐寺と高山稲荷神社を勧める傾向があったことを報告している。「病气その他の理由でゴミンにかかると、何代か前のキツネが祟っていて、弘前の白狐寺にいった神様のそばにいられるようにしてほしいと告げられるそうで、ゴミンがついて詣りに来ることもある。ゴミンがすすめるのは白狐寺と高山稲荷が多いそうである」。(直江, 1970, p.257)
- 18) 古いものではあるが、本事例の概要を以下に記す。約40年前。Aさんの祖母に種々の奇行が認められた。Aさんの叔父も原因不明の病におかされていた。Aさんの母親がS町のカミサマに拝んでもらったところ、祖母が自宅で祀る稲荷神の使いのキツネが現れて「首がとれたので納めて欲しい」と訴えた。母親がこっそり祖母の住む実家に行ってみると、はたしてキツネの置物の首が折れており、

埃をかぶったまま放置されていた。Aさんの母親は近所の稲荷神社に置物を納めようと考えたが、納め方がわからないため再度S町のカミサマを訪ねし助言を求めた。すると、キツネがカミサマに憑依して跳びはね、声音を変えたカミサマが「そこ(近所の稲荷神社)に納まる私ではない」と主張した。やむなく遠方ではあったが名高い牛湯の高山稲荷神社まで出かけて奉納してきた。その後叔父の病気は治ったものの、祖母の不審な挙動は完全には消えなかった。Aさんは「母がキツネは納めたが、本人(祖母)がちゃんと稲荷様を拝まなかったので、本人の行動は良くならなかったのではないかと考えている。(2015年、Aさんより聴取。プライバシーに留意し情報を一部改変した。)

- 19) 高山稲荷神社の信仰史および同社と土着信仰との関わりについては1994年発行『高山稲荷神社史』に詳しい。同書によれば、高山信仰には一般的な稲荷信仰のほか漁業神としての稲荷信仰、道中守護神としての稲荷信仰、祈祷師に率いられた教団的信仰、稲荷大神の熱狂的信者が教祖となっているような個性的信仰、産神信仰の変形やたたり神であるかのような信仰などがあるという。同書の著者である三代目宮司工藤伊豆は、これらの信仰に対する神社側の姿勢として、次のような見解を表明している。「神社に専門でご奉仕する我々が、『正当なる稲荷信仰としては間違ではないか』と矯正するよりも、むしろ本来の穏やかな稲荷信仰を、基本の柱としながらも、そのドロドロとした信仰の特色を、むしろ逞しい活力ある信仰へと甦らす教化活動がこれからの使命ではないか」、「正統のもの、それを支える様々なものの併存は、今後も考えていかなければならない神社の課題だと思っております」。(工藤, 1994, pp.207-210)
- 20) シンポジウム翌日の学術大会2日目、實川幹朗氏より、カミサマの営みの効果はその不確実性をもって否定することはできないとの意見をいただいた。氏の研究発表「心霊研究の方法について——証明と出会いと——」の枠内での指摘であったため、同発表の氏の抄録からその意図するところがよく表れている箇所を引用する。「靈魂もやはり、生身の人間と同じくあちら側の都合があり、気分があり、隠したり騙したりできる。そこに『操作証明型』は通用しない。加えて私たちの祖先は、また世界中の人びとが、前近代までは森羅万象に心を認めていた。それぞれの考えを持ち、あちらの都合で動き、研究者を含む人間とやり取りし、互いの間柄で振る舞いを変えてくる。だからこうした研究に、人間の勝手に『再現性』と『公共性』を求めては筋違いなのだ」(實川, 2015, p.13)。神・仏・靈

津軽のカミサマ (吉村)

にもその時の都合や気分があるのであり、カミサマの実践の効果に多少の揺らぎがあろうとも、それをもって信憑性が薄いとは言えないのである。

文献

- 江田絹子 (1970) 「津軽のゴミン」 和歌森太郎編『津軽の民俗』331-346, 吉川弘文館
- 池上良正 (1987) 『津軽のカミサマ——救いの構造をたずねて』 どうぶつ社
- 池上良正 (1992) 『民俗宗教と救い——津軽・沖縄の民間巫者』 淡交社
- 池上良正 (1999) 『民間巫者信仰の研究——宗教学の視点から——』 未来社
- 池上良正 (2008) 「公開講演会 民衆世界の宗教者たち——シャーマニズムの現在——」 『民俗学研究所紀要』 32, 1-26
- 實川幹朗 (2015) 「心霊研究の方法について——証明と出会いと——」 『日本トランスパーソナル心理学/精神医学会 第16回学術大会 プログラム・抄録集』 12-14
- 工藤伊豆 (1994) 『高山稲荷神社史』 高山稲荷神社社務所
- 森山泰太郎 (2000) 「高山稲荷神社」 谷川健一編『日本の神々——神社と聖地 第12巻 東北・北海道《新装復刊》』 292-294, 白水社
- 中村民男 (1961) 「青森県におけるシャーマニズムの社会精神医学的研究——イタコと類似者との比較——」 『順天堂医学雑誌』 7, 872-900
- 直江広治 (1970) 「稲荷信仰」 和歌森太郎編『津軽の民俗』 254-265, 吉川弘文館